



平田 幸一，鈴木 圭輔

獨協医科大学神経内科

睡眠時随伴症，睡眠関連運動障害のうち，レム睡眠行動障害はパーキンソン病をはじめとした神経変性疾患へ移行する例が多くみられ，その前駆病態とも考えられていることから変性疾患の病態解明，更には治療に結びつくものと考えられている。



一方，レストレスレッグス症候群は，既に最前線の臨床医が診断治療している疾患であり，同じ睡眠中の異常運動・行動をきたす疾患としても全く趣きが異なります。この2つを中心に最近の知見を述べたいと思います。